平成２５年度全国学力・学習状況調査結果の分析および考察

彦根市教育委員会

全国学力・学習状況調査のねらい

全国的な児童生徒の学力や、学習状況を把握分析するとともに、学校における児童生徒への教科指導の充実や学習状況等の改善に役立てます。

平成２５年度の実施状況

・実施日　　平成２５年４月２４日（水）
・実施学年　　小学校６年生、中学校３年生
・実施教科等　国語、算数・数学、
　　他に、児童生徒質問紙
市内の全小中学校（小学校 17 校、中学校７校）の全児童生徒を調査

調査の特徴

Ａ問題・・・「実生活において大切で常に活用できるようになっていることが望ましい知識や技能が身についているかを見ます」
　　→知識
Ｂ問題・・・「知識や技能を生活の場面で活用したり、課題解決のために構想を立てて実践し評価・改善したりする力がついているかを見ます。」　→活用
質問紙・・・学習意欲、学習方法、学習環境、生活などについて尋ねます。

彦根市の教科に関する調査結果

※調査の結果は、学力の特定の一部分です。

〇平均正答数(平均正答率)

	教科等	国　語		算　数・数　学	
		A「知識」	B「活用」	A「知識」	B「活用」
小学校	全 国	11.3問／18問 (62.7%)	4.9問／10問 (49.4%)	14.7問／19問 (77.2%)	7.6問／13問 (58.4%)
	滋賀県	10.6問／18問 (58.8%)	4.6問／10問 (46.4%)	14.2問／19問 (74.7%)	7.2問／13問 (55.1%)
	彦根市	10.4問／18問 (58.1%)	4.7問／10問 (47.3%)	13.7問／19問 (72.3%)	7.4問／13問 (57.3%)
中学校	全 国	24.4問／32問 (76.4%)	6.1問／9問 (67.4%)	22.9問／36問 (63.7%)	6.6問／16問 (41.5%)
	滋賀県	24.2問／32問 (75.5%)	5.9問／9問 (65.6%)	23.2問／36問 (64.4%)	6.5問／16問 (40.4%)
	彦根市	24.0問／32問 (74.9%)	5.8問／9問 (64.6%)	23.5問／36問 (65.2%)	6.7問／16問 (41.6%)

本市教育委員会としましては今回の調査結果を真摯に受け止め、今後、基礎的学力を問うＡ問題については平均正答率８０％をめざすとともに、Ｂ問題については、全国レベルを上回ることを目標に、子どもたちの学力向上に向けた取組を進めます。

彦根市の全体的な傾向

小中学校の国語、算数・数学とも、全国平均から±５ポイントの範囲内にあり、学力の全体的な傾向は全国と同程度ですが、中学校数学以外は全国平均正答率を下回りました。

国　　語

平均正答率は、小学校では国語のＡ問題で全国を下回り、Ｂ問題でも、全国をやや下回りました。

中学校では、Ａ問題で全国をやや下回り、Ｂ問題でも全国を下回りました。

小学校では、漢字を正しく書くことや、目的に応じ資料を読んでわかったことを書くこと、広告を読み、その編集の特徴を捉えることや俳句の情景をとらえることに課題がありました。

中学校では、漢字を正しく書くことや、語句の意味を理解し文脈の中で適切に使うことに課題がありました。

算数・数学

平均正答率は、小学校では算数のＡ問題で全国を下回り、Ｂ問題でも、全国をやや下回りました。

中学校では、Ａ問題は全国をやや上回り、Ｂ問題では全国と同程度でした。

小学校では、計算の仕方やグラフの読み方など、主として基礎的な学習内容の定着に課題がありました。

中学校では、「数と式」の領域で計算の仕方をしっかりと身につけていますが、Ｂ問題の自分の考えを言葉や式を使って説明することについては、昨年度と同様に課題がありました。

国　　語

特によくできていた点

小学校

・特によくできていた問題はありません。

特に課題のみられる点

・漢字を正しく読んだり、書いたりすること。

・目的に応じて資料を読み、わかったことを的確に書くこと。

・下の問題のように広告を読み、編集の特徴を捉えること。

5　小島さんは、駅にはられていた、次の【広告】を見て、考えたことをノートにまとめました。【小島さんのノートの一部】の［ア］・［イ］の中に入る内容として最もふさわしいものを、あとの1から3までの中からそれぞれ一つ選んで、その番号を書きましょう。

【広告】

※【広告】の中の②には、ふりがなを付けてあります。

【小島さんのノートの一部】

この広告には、駅のホームで目が不自由な方に出会ったときに、声をかけることをすすめようとするねらいがある。

そのために、まず、①の部分では、広告の作り手が［ア］内容を、よびかけの表現を用いて大きな文字で示している。そのことは、広告を見る人に強い印象をあたえている。

次に、②の部分では、①をもとに、実際に［イ］を示している。そのことにより、広告を見る人が行動につなげやすくなっている。

〜（内容が続く）〜

ア
1　広告を見る人に行動をうながそうとする
2　目が不自由な方を勇気づけようとする
3　疑問に思ったことを報告しようとする

イ
1　声をかけるときの順序
2　声をかけるときの注意点
3　声をかけるときの具体例

・スピーチの表現を工夫すること。

・見出しにあわせて必要な内容を適切に書き加えること。

特によくできていた点

中学校

・書いた文章を読み直し、目的に応じた表現に直すこと。

特に課題のみられる点

・語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと。

・図と文章の関係を捉えること。

・下の問題のように、新聞記事の構成や表現の特徴を捉えること。

3

次は、中学三年生の小川さんが興味をもった【新聞記事】と、それに関連して探した情報を小川さんがまとめた【資料】です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

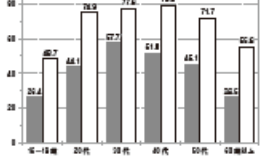
【新聞記事】

漢字、正確に書けますか？

「書く力が衰えた」66・5％

文化庁　国語に関する世論調査

携帯電話や電子メールなどの普及によって「漢字を正確に書く力が衰えた」と感じる人が66・5％に上り、平成13年度調査時より25・2ポイント増えたことが20日、文化庁の「平成23年度国語に関する世論調査」で分かった。



調査では、携帯電話や電子メールなどの普及による情報交換手段の多様化が、日常生活に影響を与えている例として思い当たることを複数選択での質問。その結果「漢字を正確に書く力が衰えた」と回答した人が大幅に増えた。年齢別に見ると、20代～50代で7割台となっており、平成13年度には2割台だった16～19歳と60歳以上でも、それぞれ、5割弱と5割台半ばとなっている。

また、全ての年代で平成13年度調査の結果よりも今回の調査結果の割合の方が高くなっており、最も差の小さい30代で19・9ポイント、最も差の大きい20代では、30・8ポイントの差となっている。

このほか「手紙やはがきは余り利用しないようになった」が15・6ポイント増の57・2％、「手で字を書くことが面倒くさく感じるようになった」が10・1ポイント増の42・0％となった。

中学校の国語科教諭（47）は「似た形の文字の使い分けや同じ読み方をする語句の区別などについては、今後も注意して教え、情報機器と上手に付き合えるようにさせたい」と話した。

平成24年9月21日（金）「全国新聞」朝刊より

一　【新聞記事】の書き方の特徴を説明したものとして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　始めに要点をまとめて述べた上で、具体的な数値を取り上げて詳しく書いている。

2　始めに書き手の意見を述べた上で、複数の見方を取り上げて多面的に書いている。

3　問題の解決方法を見出して示した上で、グラフを用いて分かりやすく書いている。

4　最新の情報を見出しで示した上で、出来事の流れを時間の経過に沿って書いている。

二　小川さんがまとめた【資料】は、どのような疑問を解決するための参考になりますか。次の1から4までのうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

1　携帯電話や電子メールなどの情報交換手段が多様化したとあるが、生活の中で漢字を書く機会は減っているのか。

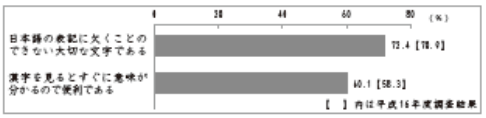
2　漢字を書く力が衰えたと感じている人の割合が増えているが、漢字の必要性について人々はどのように考えているのか。

3　手で字を書くことが面倒くさく感じるようになった人の割合が増えているが、情報機器の普及と関係があるのか。

4　手紙やはがきは余り利用しなくなったと感じている人の割合が増えているが、漢字を書く力と関係があるのか。

小川さんがまとめた【資料】

漢字についての主な意識



（文化庁『平成21年度 国語に関する世論調査』による。）

小学校では漢字の読み書きについて課題がありました。中学校においても語句の意味を理解し文の中で使うことに課題がありました。新出漢字の学習に繰り返し取り組むとともに、日頃から学習した漢字や語句を文中で使用し、確実な定着を図ることが大切です。

小学校、中学校とも、それぞれの活字メディアの工夫を考えたり、メディアから自分の必要とする情報を集めたりすることに課題がありました。

日常生活では、文章だけでなく、新聞や広告、雑誌など日常生活における様々なメディアから情報を得るときに、表現の工夫について考えるとともに、複数の情報を関連づけて読む経験をすることが大切です。

算数・数学

特によくできていた点

小学校

・特によくできていた問題はありません。

中学校

・空間における直線の位置関係について理解していること。

・比例の表から、関係を表す正しいグラフをみつけること。

・多角形の外角の意味を理解していること。

・次ページの問題のように、問題場面における考察の対象を明確に捉えること。

特に課題のみられる点

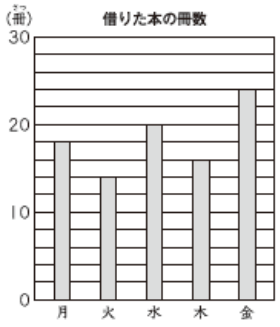
・小数の加法の計算をすること。

・商が小数になる除法の計算をすること。

・合同な三角形を書くための条件を理解していること。

・下の問題のように棒グラフの数値を読み取ること。

下の棒グラフは，ある学級の児童が，１週間に借りた本の冊数を調べたものです。

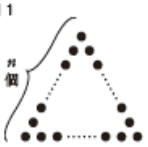


いちばん多く本を借りたのは何曜日ですか。また，その曜日に何冊借りていますか。それぞれ答えを書きましょう。

・次ページの問題のように、表やグラフを用いて、問題解決の方法を数学的に説明すること。

6 図１のように，１辺に n 個ずつ碁石を並べて正三角形の形をつくり，碁石全部の個数を求めます。

図１



次の（１）から（３）までの各問いに答えなさい。

（１）１辺に５個ずつ碁石を並べて正三角形の形をつくります。このとき，碁石全部の個数を求めなさい。

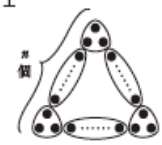
（２）図１で，碁石のまとまりを考えて，ある囲み方をすると，碁石全部の個数は，$3(n-1)$ という式で求めることができます。その囲み方が，下のアからエまでの中にあります。正しいものを１つ選びなさい。

ア

イ

ウ

エ

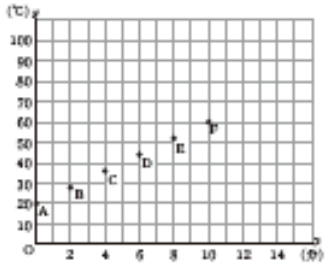


3 太一さんは，水を熱したときの水温の変化を調べました。そして，水を熱した時間と水温について下の表のようにまとめ，x 分後の水温を y ℃として，グラフに表しました。

調べた結果

水を熱した時間と水温

熱した時間 x（分）	0	2	4	6	8	10
水温 y（℃）	20.0	28.2	36.1	44.2	52.0	60.0



次の（１）から（３）までの各問いに答えなさい。

（１）水温は，熱し始めてから10分間で何℃上がりましたか。10分間で上がった温度を求めなさい。

（２）太一さんは，水温が80℃になるまでにかかる時間を求めるために，調べた結果のグラフにおいて，水を熱した時間と水温の関係を表す点Aから点Fまでのすべての点が一直線上にあると考えることにしました。

このとき，水温が80℃になるまでにかかる時間を求める方法を説明しなさい。ただし，実際に時間を求める必要はありません。

小学校では小数点以下の桁数の異なる２数の加法や、商が小数になる除法について課題がありました。前学年までの学習内容を振り返るとともに、小数点の意味を理解したうえで、正しく計算ができるよう繰り返し練習に取り組み、定着を図ることが大切です。

また合同な三角形をかくための条件や、棒グラフの読み方など、実際に三角形をかいたり、グラフを読んだりすることで基礎的な知識の定着を図ることも大切です。

中学校では、基礎的な力は身についていました。今後は、事象の変化を単純化して、その特徴を的確に捉えられるようにしたり、資料から必要な情報を的確に読み取る力を付けたりすると、さらに数学の力が伸ばせます。

今後、意味を考えながら計算練習を繰り返すことで、学習内容をしっかり身につけるとともに、目的に応じて資料を収集して整理し、情報を読み取ったり、視点を変えてまとめ直したりすることで、事柄の特徴を捉える経験を積むとよいでしょう。

質問紙調査

（全国の結果と比べて）

特によいと思われる点	特に課題のみられる点
小学校 ・自分には、よいところがあると思っている児童の割合が高い。 ・携帯電話やスマートフォンを持っていないと答えた児童の割合が高い。 ・家で、学校の授業の予習、復習をしていると答えた児童の割合が高い。 ・学校に行くのは楽しいと答えた児童の割合が高い。 ・今住んでいる地域の行事に参加していると答えた児童の割合が高い。 ・国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいると答えた児童の割合が高い。 ・読書は好きと肯定的に答えた児童の割合が高い。	・本を読んだり、借りたりするために、学校図書館・室や地域の図書館に週１回以上行くと答えた児童の割合が低い。 ・算数の勉強が好きと答えた児童の割合が低い。
中学校 ・家の人（兄弟姉妹除く）と普段（月～金曜日）、夕食を一緒に食べていると答えた生徒の割合が高い。 ・携帯電話やスマートフォンを持っていない生徒の割合が高い。 ・土曜日の午前中は学校の部活動に参加して過ごしていると答えた生徒の割合が高い。 ・学校に行くのは楽しいと答えた生徒の割合が高い。 ・今住んでいる地域の行事に参加していると答えた生徒の割合が高い。 ・数学の授業の内容がよくわかると答えた生徒の割合が高い。	・将来の夢や目標をもっていると答えた生徒の割合が低い。 ・家で、学校の宿題をしている生徒の割合が低い。 ・自分の考えを他の人に説明したり、文章を書いたりすることは難しいと思っている生徒の割合が高い。 ・国語の勉強が好きと答えた生徒の割合が低い。 ・解答を文章で書く問題で、最後まで解答を書こうとした生徒の割合が低い。

昨年度と同様に、小学校・中学校とも今住んでいる地域の行事について、多くの子どもたちが参加していると回答しています。これは、参加できる行事が地域で企画されているということです。地域の行事に参加した満足感が活動への参加意欲につながり、豊かな体験が、子どもたちの学習を支えていると考えられ、今後も子どもたちが地域と深く関わっていくことが望まれます。

また、多くの子どもが学校に行くのが楽しいと答えています。地域での人とのつながりとともに、学校での友達とのつながりを大切にしていくことが必要です。

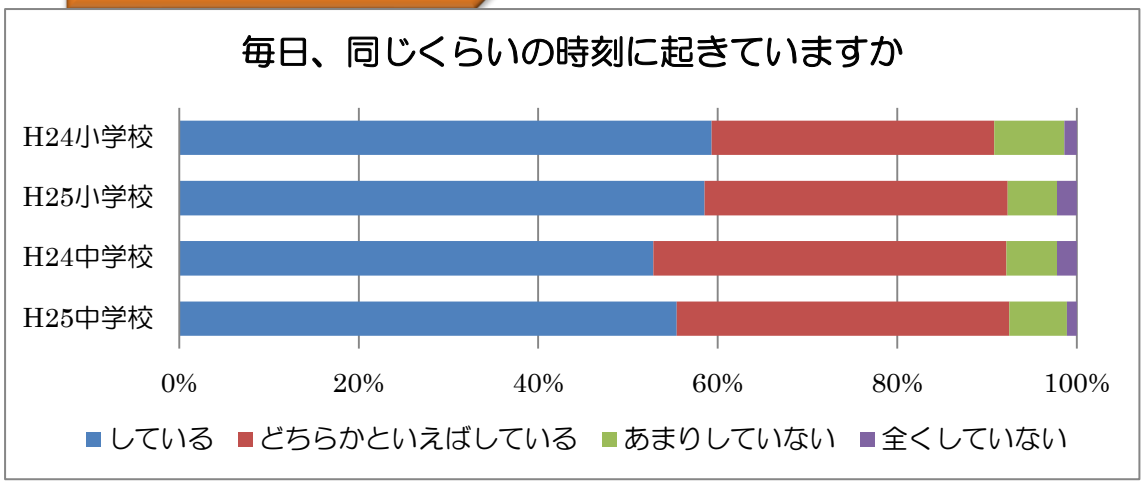
小学校から中学校にかけて、将来の夢や目標をもっている子どもの割合が大きく減少します。夢や目標は、学習や生活をするうえで意欲につながります。子どもたちとコミュニケーションをとり、それぞれの思いをしっかりと受け止めることが大切です。

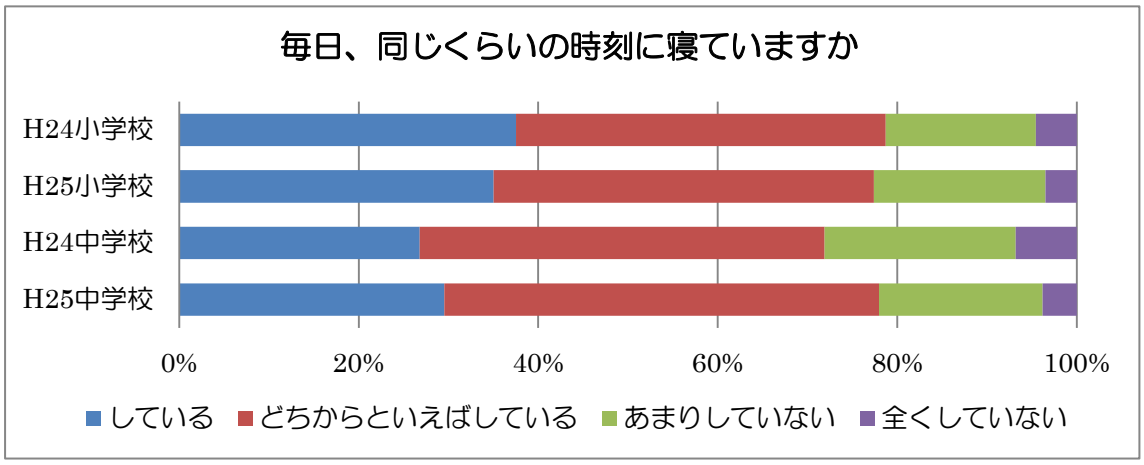
学習に関することとしては、小学校において読書が好きと答えている児童の割合は高いものの、図書館（室）に行っている割合は低くなっています。子どもたちの読書意欲を満たすために、図書館（室）の積極的な活用が望まれます。

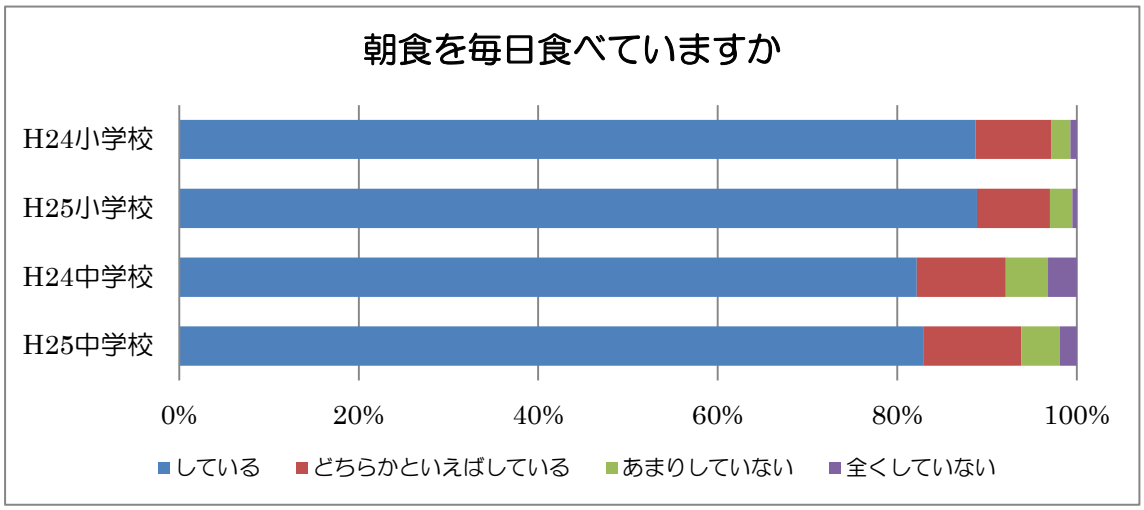
また、中学校で自分の考えを他の人に説明したり、文章で書いたりすることへの抵抗感をもつ生徒の割合が高くなります。学習の中や日常生活で聞き手や読み手を意識して話したり書いたりして、自分の考えをしっかりと伝える経験を何度も積むことにより、その抵抗感の解消を図ることも大切です。

質問紙の質問内容別

生活習慣について







彦根市の取組

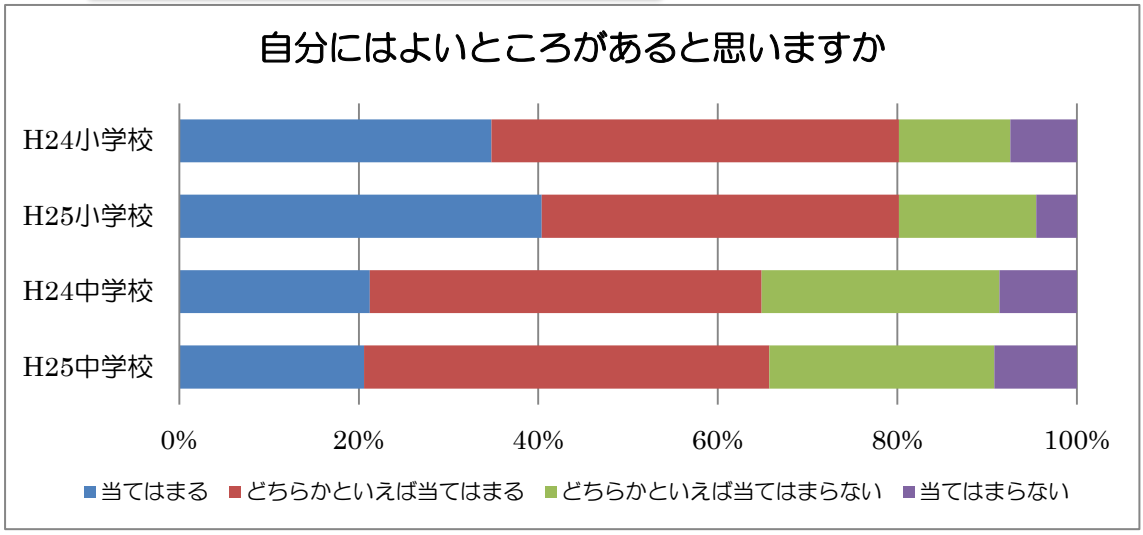
子どもたちの日々の学習を支えるものは、基本的な生活習慣（規則正しい生活）です。上のグラフからはしっかり朝食を食べて、活動するエネルギーを充電して学校に登校していることがわかります。

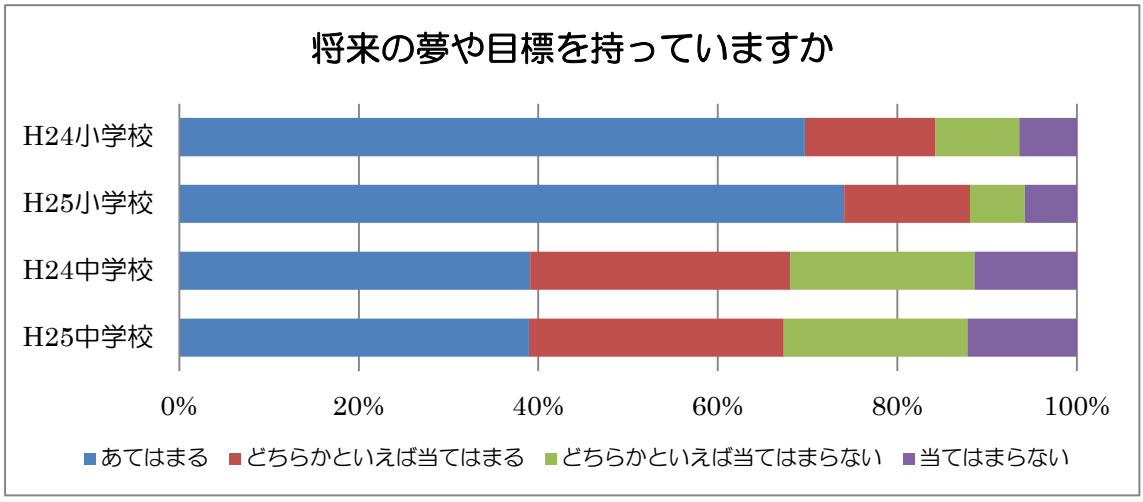
中学校では、昨年度に比べて肯定的に答えている生徒が増えました。

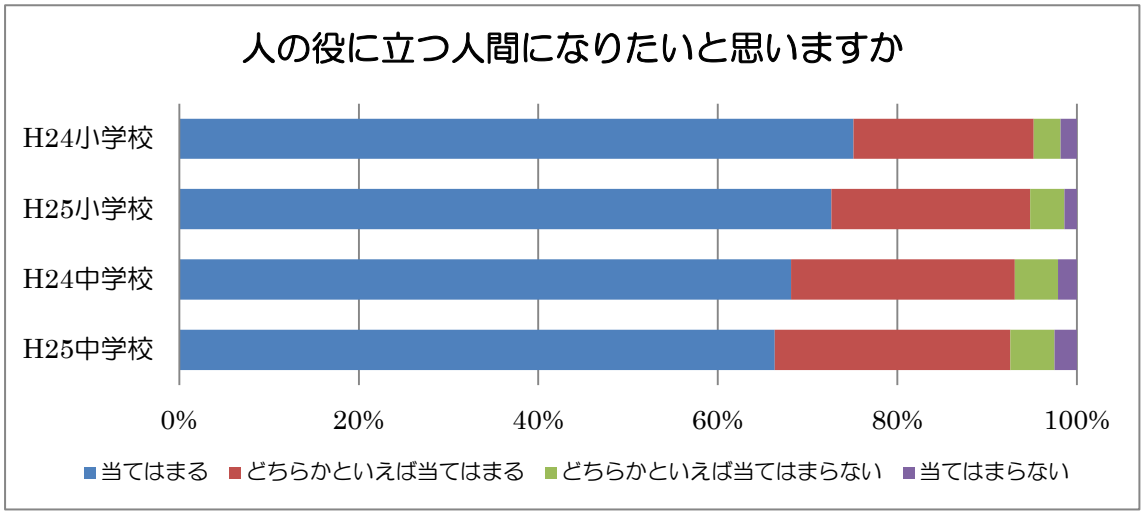
彦根市では教育フォーラムや、ひこねっこ学びの６か条において生活習慣の確立を呼びかけており、ご家庭でも取り組んでいただいております。

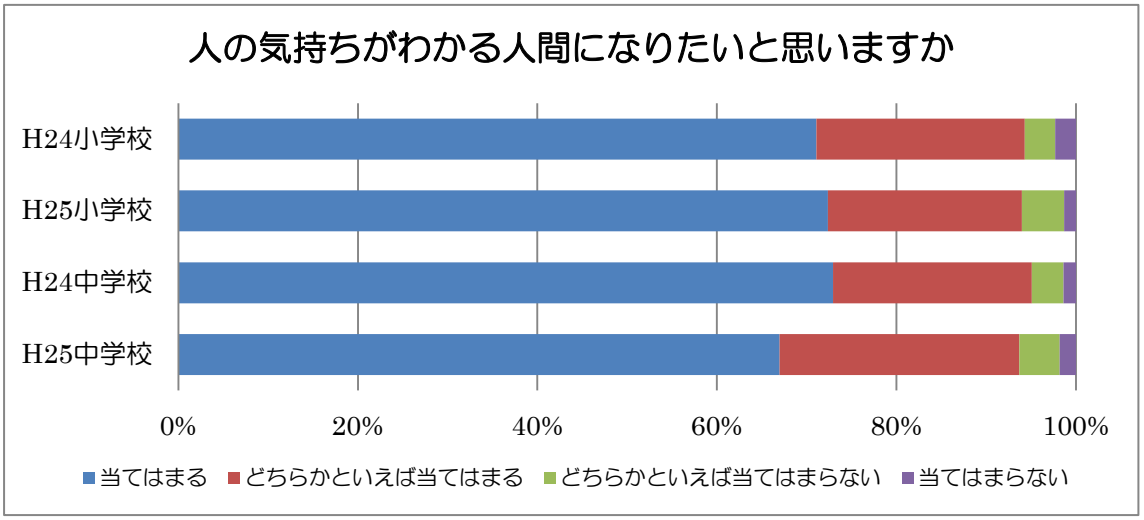
今後も引き続き、家庭での生活習慣の確立にご協力をお願いします。

自尊感情







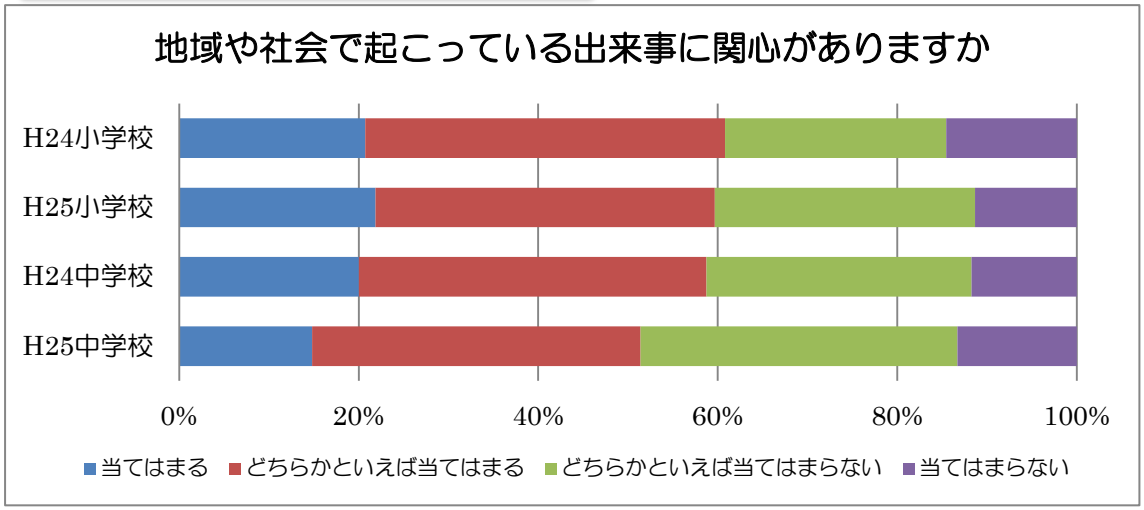


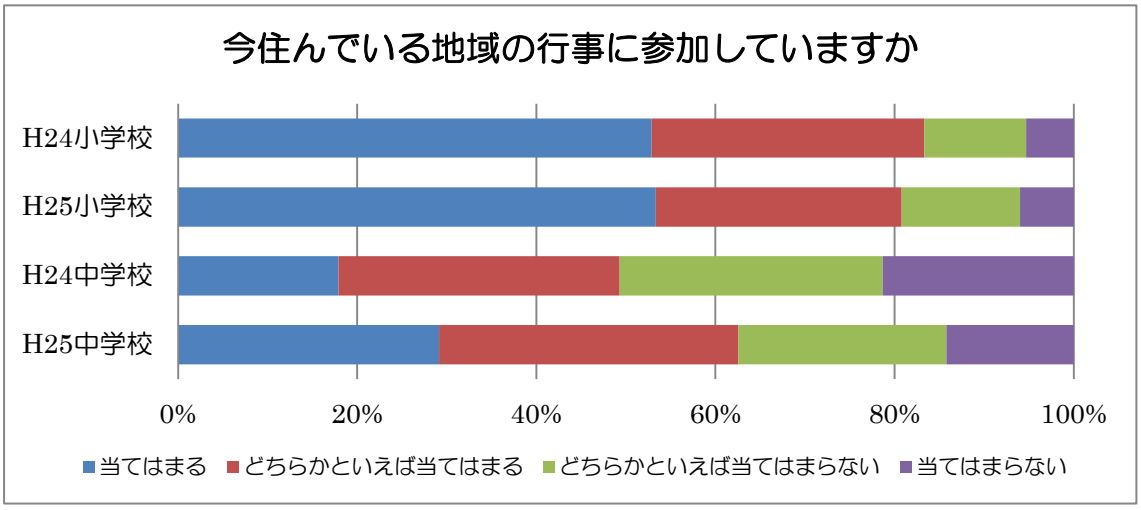
彦根市の取組

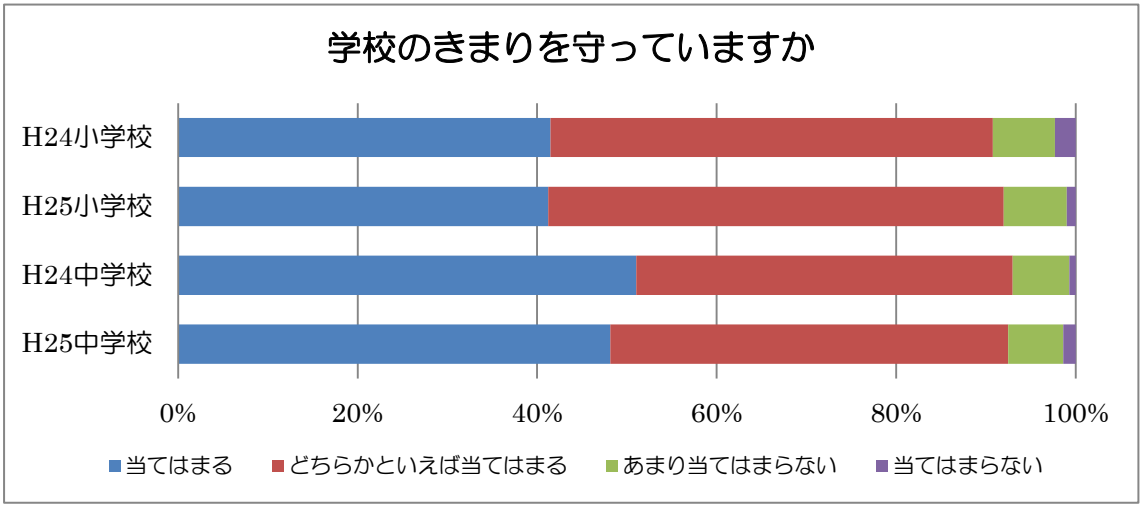
学ぶことのよさや生きることのよさを感じ、自分自身を向上させる意欲をもつためには、まずは自分自身のよさを感じたり気づいたりすることが大切です。上のグラフからは、昨年度と比べて人の役に立つ人間になりたいと思う子どもの減少が気になります。

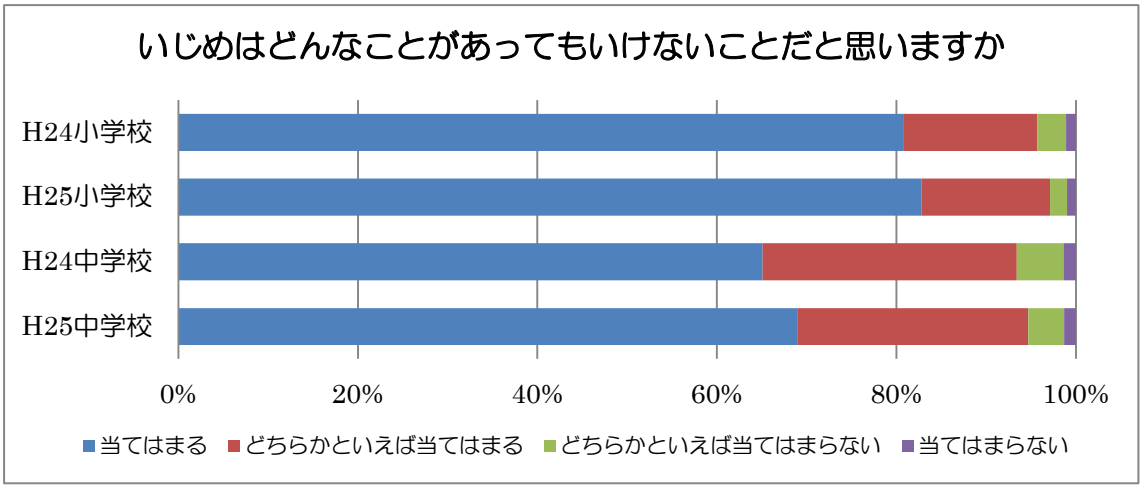
彦根市では、ESD（持続発展教育）、自然の中での体験活動、異学年交流や中学生の地域貢献活動、職場体験などのキャリア教育を通して、自らのよさに気づき、自分自身を向上させる意欲をもったり、自分のよさを発揮できたりするとともに、社会のために自分のできることを考え実践することができるよう取り組んでいます。

社会に対する興味関心や規範意識









彦根市の取組

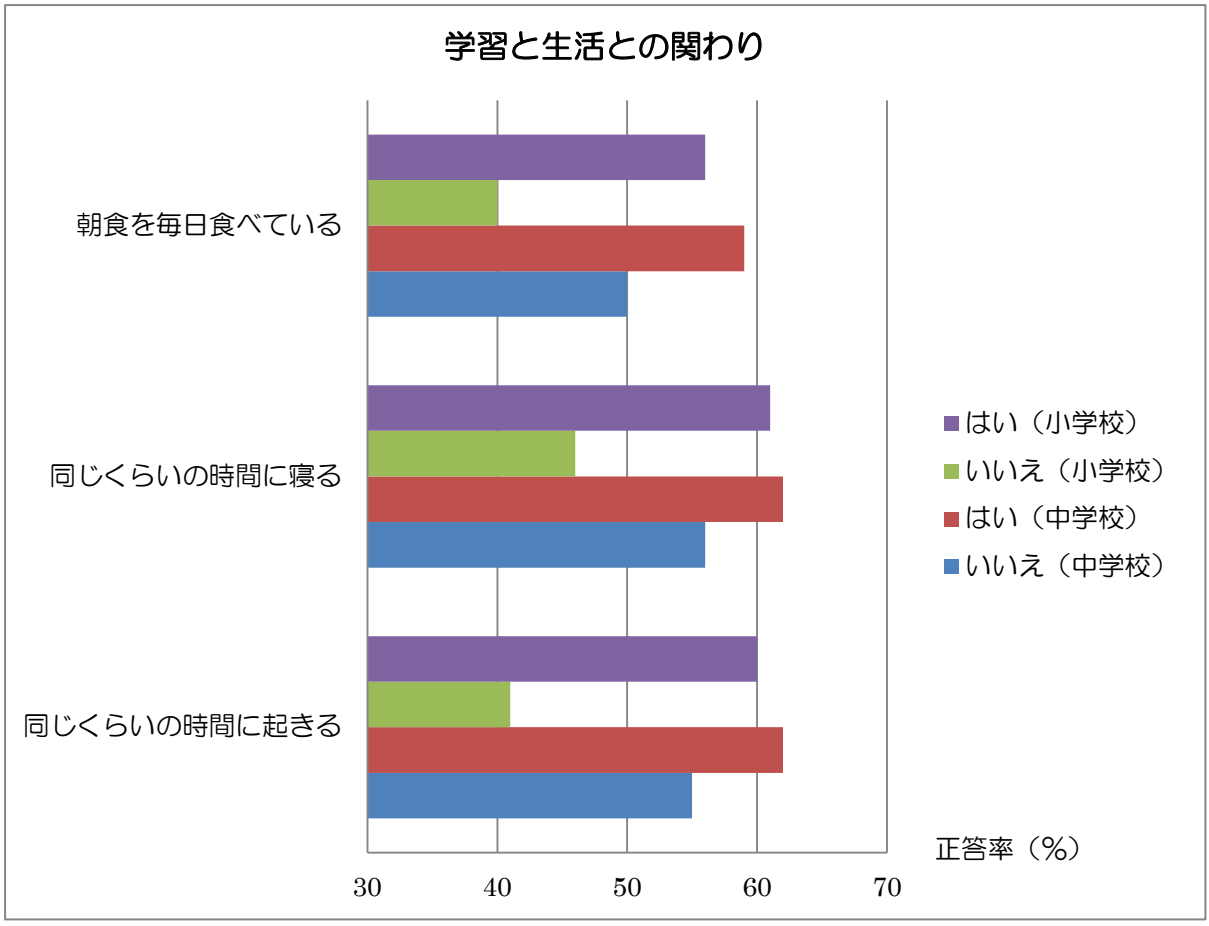
上のグラフから、多くの子どもたちが、いじめはどんなことがあってもいけないと考えている姿がうかがえます。

いじめを許さない思いとともに、自分たちの学校を自分たちでよりよくしていこうとする気持ちや実践力をもつことが大切です。その思いが、学校から地域へと広がることで、地域に進んで関わる子どもの育成につながります。

彦根市では、児童会や生徒会活動の取組を充実させることにより、いじめの防止に取り組み、子どもの自己指導の力を育みます。

学力調査と質問紙調査とのクロス集計から

学習と生活との関わりについて



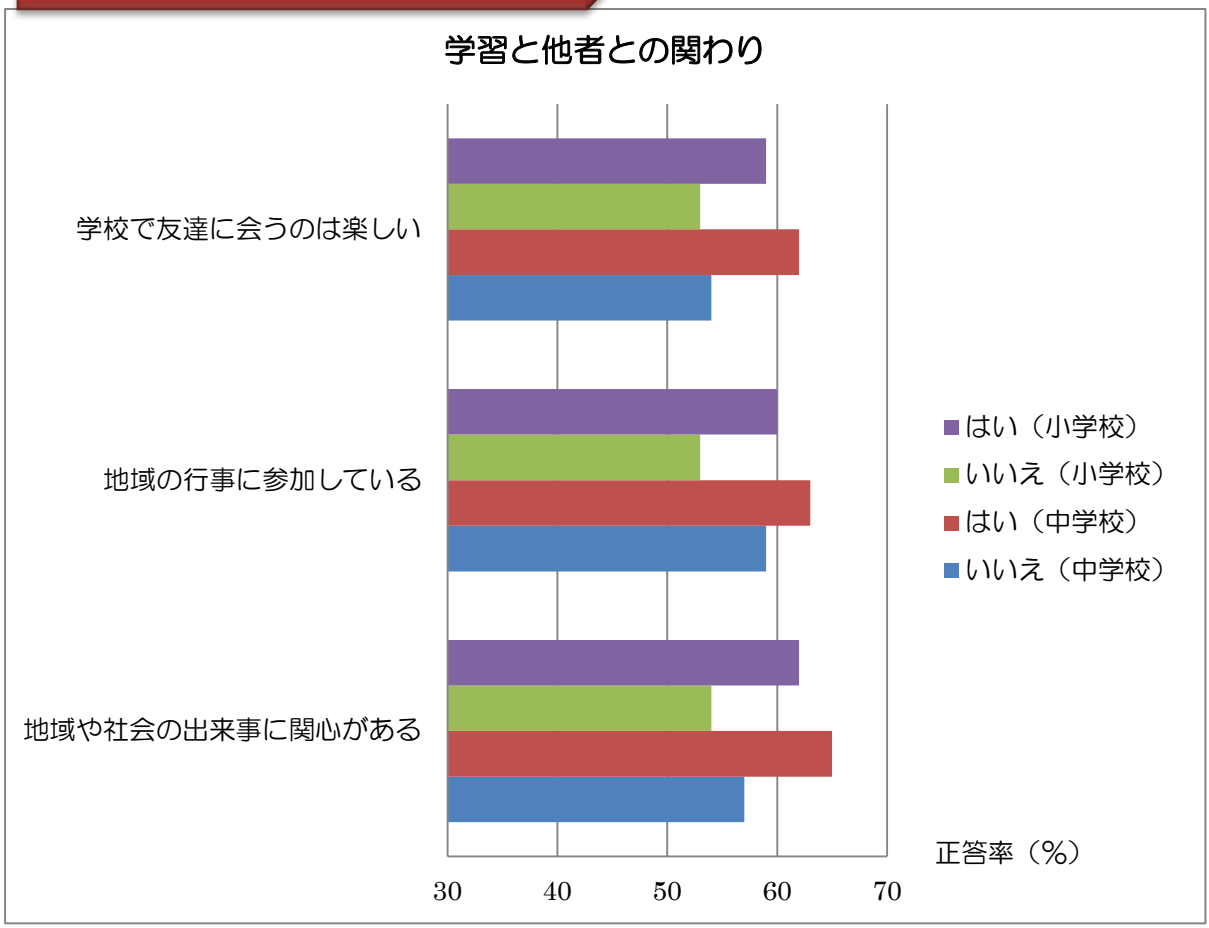
◇「朝食を毎日食べていますか」という問いに肯定的に答えた子どもは、否定的に答えた子どもに比べて、正答率が小学校では１５ポイント以上、中学校でも 10 ポイント近く高くなりました。

◇「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」という問いに肯定的に答えた子どもは、否定的に答えた子どもに比べ、正答率が小学校では１３ポイント程度、中学校では７ポイント程度高くなりました。

◇「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」という問いに肯定的に答えた子どもは、否定的に答えた子どもに比べ、正答率が小学校では 20 ポイント程度、中学校では８ポイント程度高くなりました。

特に小学校において「早寝、早起き、朝ご飯」等の規則正しい生活リズムと学力の間に関係がみられました。しっかりと睡眠をとって体を休め、朝食を摂ることで一日のいいスタートを切ることが大切です。

学習と他者との関わりについて



◇学校で友達に会うのは楽しいと肯定的に答えた子どもは、否定的に答えた子どもに対して、正答率が小学校で６ポイント、中学校で９ポイント高くなりました。
◇今住んでいる地域の行事に参加していると肯定的に答えた子どもは、否定的に答えた子どもに比べ、正答率が小学校で７ポイント高くなりました。
◇地域や社会で起こっている問題や出来事に関心があると肯定的に答えた子どもは、否定的に答えた子どもに比べ、正答率が小学校・中学校とも８ポイント高くなりました。

小学校、中学校とも、自分の周りの友達や地域・社会に対して興味や関心をもち、積極的に関わろうとする態度と学力との間に関係がみられました。
それぞれの発達段階に応じて、他者と関わる経験をすることで、自分の価値に気付き、その価値を高めようと努力することができるのではないかと考えられます。
そのためにも、子どもたちの目を子どもを取り巻く多くのものに向けていくことが大切です。

学力向上に向けた具体的な方策

学力調査から

国語、算数・数学とも資料から必要とする情報を集めたり、複数の情報を関連づけたりして考えることに課題がありました。

他には、漢字や語句の意味、計算など基礎的な力にも課題がありました。

今後、基礎的・基本的な内容の定着を図る学習に力を入れるとともに、自らの考えを明確にし、表現する学習の充実に取り組みます。

国語科においては、資料に表された情報を正しく読み取るとともに、読み取った情報を的確に表現する学習活動を重視します。

また、文章の構成や展開に着目し読むことで、構成や表現の特徴を捉える学習を充実します。

算数科においては、新しい内容を学習するとき、今までに学習したことを用いて、問題を解く過程を重視します。問題の解決にあたっては、作業的、体験的な算数的活動をより一層工夫します。

数学科では、目的に応じ、筋道を立てて説明する活動を重視します。そのため、事象を数学的に説明したり、資料を適切に読み取ったり、根拠を明確にしたりする学習をより一層充実させます。

質問紙調査から

小学校、中学校とも「学校に行くのが楽しい」と答えている子どもが多いことがよいと思われる点としてあげられます。また、昨年度に引き続き、「地域の行事に参加している」と答えた子どもが多いこともよいと思われる点です。学校や地域社会での人とのつながりを深めることが学校内外の多様な環境から学ぶ意味において、今後も大切にしていきたい点です。

気になる点としては、「将来の夢や目標を持っている」と答えた中学生が、小学生に比べて減少している点です。「夢や目標」は学びのための大きなエネルギーです。周囲から認められることで、自らのよさに自信をもち、将来の目標が設定できるような学習や活動に取り組みます。

学力調査と質問紙調査のクロス集計から

学力調査と質問紙調査をクロス集計することにより、昨年度に引き続き生活習慣と学力の間には関係があることが明らかにみえてきました。例えば、朝ご飯をしっかりと食べている子どもの平均正答率は、そうでない子どもに比べ１０ポイント以上高くなっています。また、「同じくらいの時間に寝る」「同じくらいの時間に起きる」という設問に対しても肯定的に答えた子どもは正答率が高くなっています。

特に、小学校ではその傾向が顕著であり、早い段階で規則正しい生活習慣を身につけることの大切さがみえてきました。

他者との関わりと学力との関係についても、より意欲的に関わろうとしている子どもの正答率が高くなりました。他者への積極的な関わりが学習にも大きな役割を果たしています。

規則正しい生活習慣を身に付け、周囲や地域・社会に対して積極的に関わる彦根の子どもを育てるため、学校、家庭、地域がそれぞれの場で力を発揮できるよう、働きかけていきます。